

チャのクワシロカイガラムシ

1 形態と生態

(1) 成虫の体長は、雌は 1.1 ~ 1.3mm、雄は 0.7 ~ 0.9mm。雌は円形に近い楕円形で、淡黄色~橙黄色をしており、白い介殻で覆われています。雄成虫は、体色は橙赤色で羽があり、飛ぶことができます。

(2) 3 齢幼虫は雌だけで、雄は 3 齢とはならず、白く細長いまゆの中で蛹になります。

(3) 通常、年 3 回発生し、雌は成虫で越冬します。介殻の中の雌は腹の下に多数産卵します。

(4) ふ化した幼虫は殻からはい出て、枝、幹に定着、口針を挿入して樹液を吸い、茶樹を弱らせます。ふ化幼虫の体長は 0.3mm です。

(5) ツノロウムシ、チャノマルカイガラムシまたはアオバハゴロモをクワシロカイガラムシと誤認することがあるので注意しましょう。

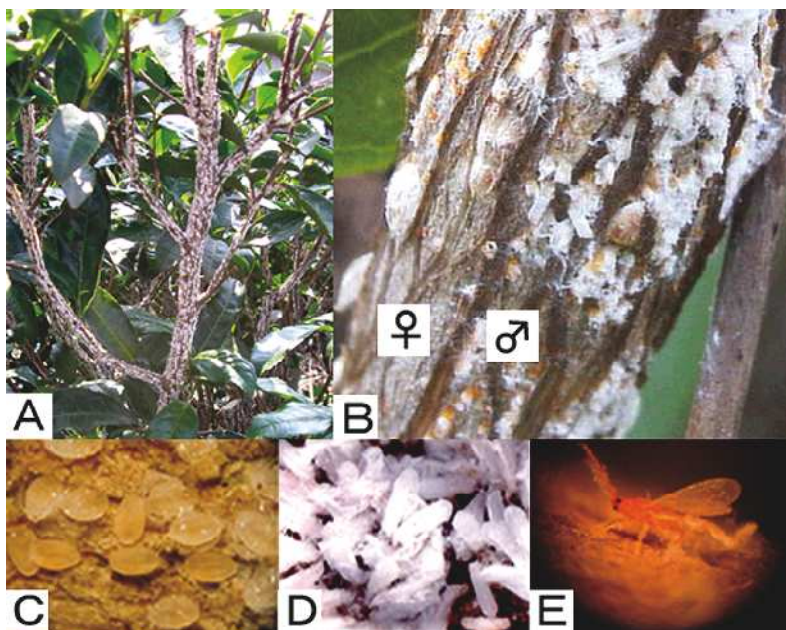


写真1 チャのクワシロカイガラムシ被害樹(A)、雄まゆと雌成虫(B)、ふ化幼虫(C)、雄まゆ(D)、雄成虫(E)

2 被害の様子

(1) 茶樹に寄生すると、初め芽の生育が不良となり、二番茶収穫以降、芽の伸びが悪化するほか、新梢部の枯死などが始まります。

(2) 8月中旬以降、新芽の伸びが悪い摘採面上に、花芽が異常に着生したりします。また、被害が進むと古葉が黄変して落葉し、さらには枝や幹が枯死し茶園は荒廃します。

(3) クワシロカイガラムシの発生が見られるようになった茶園では、1~数か所に発生の起点と思われる激発株が認められます。

(4) 茶園の周縁部に被害株が多い傾向があります。



写真2 三番茶芽生育不良



写真3 花芽の異常着生



写真4 坪枯れを生じた樹冠面

3 発生について

(1) 気象条件

降水量が多く加湿条件下ではふ化幼虫が死亡し、発生量が減少することが知られています。逆に、ふ化幼虫期が高温・乾燥に経過すると発生が助長されると考えられます。

(2) 寄主植物とチャの品種

クワシロカイガラムシが寄生する植物は、ヤナギ、ケヤキ、クワ、ナシ、モモ、クズ、チャ、カキなどきわめて多く、これらが発生源となる可能性があります。本県で栽培されている品種のうち、‘さやまかおり’を除くほとんどはクワシロカイガラムシが発生しやすい品種です。

(3) 苗木

クワシロカイガラムシ多発地域からの苗木導入により、今まで発生がなかった茶園に発生がみられるようになることがあります。発生に気がつくまでに4年前後かかるケースもあります。

(4) 発生消長

雌成虫で越冬し、4月中旬～下旬に産卵、5月中旬頃から1回目のふ化が始まります。

防除時期であるふ化幼虫の発生は、本県では5月中旬～6月上旬と7月下旬～8月上旬及び9月中旬～10月上旬の年3回と考えられます。3世代目は1、2世代目に比べ発生時期がそろわなくなることがあります。

右図は発生ほ場および発生ほ場からの切り枝観察にもとづいて推定した発生消長です。

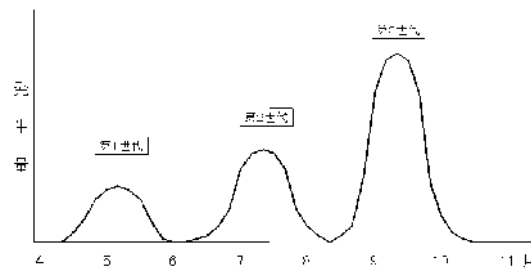


図1 クワシロカイガラムシ(ふ化幼虫)の発生消長

6 防除適期と防除方法

- (1) 本県育成品種である‘さやまかおり’はクワシロカイガラムシに対して、たいへん強い抵抗性があり、また、‘さいのみどり’も本種に対して抵抗性があるので、積極的に導入しましょう。
- (2) 防除適期であるふ化幼虫発生期に薬剤散布を実施します。第3世代のふ化幼虫は9月中旬～10月上旬頃ですが、発生時期がそろいにくいので、1週間後に薬剤の種類を替え、再散布すると効果があります。
- (3) 薬剤散布は、成木園で10 a当たり1,000 ㍩を、噴口を摘採面にたたきつけるようにして散布する「たたき散布法」の実施や茶株の中に差し込むなどして株もとや枝幹に十分かかるように行います。同じ薬剤を繰り返し使用しないようにしましょう。
- (4) 一番茶収穫後に防除対策を実施する場合は、中切り更新して防除すると有効です。
- (5) 第1世代幼虫発生時期に米ヌカ(40kg/10a相当量)を枝幹に付着するように処理すると幼虫が定着できなくなり発生抑制効果があります。
- (6) 発生ほ場で使用した摘採機や整せん枝機をそのまま他の茶園の作業に使用すると、発生が拡大する場合がありますので、注意しましょう。
- (7) 購入苗の定植の際は、株もとに越冬中の雌成虫の寄生がみられないか十分注意しましょう。
- (8) 発生ほ場の周囲にナギナタガヤ草地帯(約1m幅、6kg/10a相当量、10月は種)を設置し、捕食性天敵(ナナホシテントウ等)を増加させることでクワシロカイガラムシの防除効果が期待できます。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は周囲へ飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課 一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県茶業研究所栽培担当 TEL 04-2936-1351

埼玉県病害虫防除所 TEL 048-539-0661



©埼玉県 2005



彩の国埼玉県